

パチスロ史

～誕生から5号機まで～

吉國純生

山佐株式会社 執行役員

画期的なゲーム性が次々 4号機登場で市場が拡大

1991（平成3）年に機械基準が示されてから長らく登場が待たれた4号機は、1992（平成4）年12月、新規参入の外資系メーカーであるエレクトロコインジャパ

ン株式会社（現在の株式会社エレコ）がシングルボーナスの集中を掲載したA-Cタイプ『チェリーバー』【写真1】を登場させ、ようやく4号機時代の幕が切って落とさ

第5回 パチスロの確立

れた。『チェリーバー』は、新たなゲーム性を盛り込んだの登場ということもあり注目を浴びたが、パチスロ人気が著しく冷え込んでいた当時の状況下において、パチスロ人気の回復は容易なことではなかった。その為、その後も暫くは厳しい状況が続いていたのである。

「ニューパルサー」が 22万台ヒットで“活”

パチスロファンのみならず業界全体がパチスロの行く末に不安を感じていた時、救世主と称され、パチスロの歴史に名を残す、山佐株式会社の『ニューパルサー』【写真2】が登場を果たす。

1993（平成5）年5月に登場した『ニューパルサー』は、ビッグボーナス主体のゲーム性という標準的なAタイプであったが、愛くるしいカエルのビッグボーナス絵柄、重低音の鳴り響くFM音源を使用した効果音、そして山佐の伝統ともいえる大量リーチ目などが評価され、最終的に販売台数が約22万台という大ヒットを記録する。

『ニューパルサー』の販売当時の様子を少し紹介しよう。販売当初、



【写真1】チェリーバー

実は思うように台数が伸びず苦戦を強いられていた。当時の機種情報誌で、メインで取り上げられなかったことから、販売当初の注目の低さを物語っているのが分かる。それが3～4か月が経ったころから市場で認知され始め、製造部門は日夜残業が続くフル稼働状態、営業部門は契約台数の配分と納品設置作業に追われる日々と、生産・販売ともに総力を挙げて追いつかない状況になったのである。私は、これまで数多くの機種を世に送り出しているが、『ニューパルサー』は私にとって、この先も忘れることのできない思い入れの深い機種であるといえる。

運が左右「期待値方式」 当初不評のリプレイ

4号機は1992（平成4）年の初登場から、完全に市場からなくなる2007（平成19）年まで、



【写真2】ニューパルサー

非常に長い期間、稼働している。この間、規定（規則の部分）そのものは変わらないが、解釈の変更があつて、幾度も新しいゲーム性を有したパチスロが登場している。基本的な4号機の特徴を紹介しよう。まずビッグボーナスが、3号機まで主流となっていた「純増方式」が禁止となり、「期待値方式」のみ採用となったことが挙げられる。「純増方式」の場合、ビッグボーナスの小役ゲームは一定のため、獲得枚数にばらつきが生じることがなかったが、「期待値方式」の場合、通常ゲーム中と同様にビッグボーナス中でも完全確率による抽選がおこなわれるため、獲得枚数

は必然的にばらつくことになる。運に左右されることが多くなったといえよう。次に、新たな機能として、リプレイ（再遊技）搭載が義務付けられたことが挙げられる。規定では、設計上1分間に2回以上の割合で出現（＝概ね7・3ゲームに1回の割合で出現）するように定められている。今でこそ何の違和感もなく遊技できるが、登場最初は打つリズムが崩れるなど不評の声が圧倒的に多かった。しかしながら、大半の機種がビッグボーナス中は、リプレイ揃いをJACインにして、いたこともあつて、JACインを阻止して小役ゲームを延命させる、

いわゆる「リプレイはずし」が誕生するなど、すぐに重要な位置付けのものとして認識されるようになっていた。

「V2チップ」採用でセキュリティ強化

他には、ボーナスや小役のフラグ告知機能の搭載が可能となったことや、3号機で300分の1以上に引き上げられたシングルボーナスの集中時のパンク確率がAタイプで150分の1以上、Bタイプで160分の1以上とさらに引き上げられたことが挙げられる。

また、セキュリティ対策強化を目的として、日電協メーカーでは、4号機からメインCPU（中央演算処理装置）として株式会社エルイーテックの「V1チップ」の搭載を開始している。さらに、その後採用となる「V2チップ」は、「V1チップ」では外付けであったプログラムを格納しているROM（読み出し専用メモリー）を内蔵させたワンチップとなり、ROM交換によるプログラムの改変を困難なものにし、セキュリティの強化を図っていた。チップは、人間でいえば脳にあたる極めて重要



【写真3】回胴式遊技機販売商業会（第1回通常総会の様子）

な箇所である為、常に磐石のセキュリティが求められ、「V2チップ」以降も更なるセキュリティ強化が施された新チップが登場している。パチスロの市場規模が拡大する中、1994（平成6）年6月、パチスロ販売会社の団体である「回胴遊商（回胴式遊技機商業協同組合）」の前身にあたる「回胴式遊技機販売商業会」が販売会社121社、日電協組合員21社により設立される【写真3】。流通段階にある販売会社の健全化に積極的に取り組むことを目的に組織され、今日では、中古機の流通やパチスロの検定切

れに伴う認定作業を取りまとめる
主管団体として、日電協とともに
パチスロ業界を支える中核をなし
ている。

目押し効果が人気の 「克蘭キーコンドル」

市場の方に目を向けよう。「ニ
ューパルサー」の大ヒットは、新
たなファンを呼び込み、冬の時代
といわれていたパチスロ業界を再
び活性化させることに成功した。
設置されていないパチンコ店を探
す方が難しいといわれるほど、パ
チスロは、「ニューパルサー」一色
の状態がしばらく続いたのである。
そんな時、1995（平成7）年
7月、ユニバーサル販売株式会社
（現在の株式会社ユニバーサルエ

ンターテインメント）の「克蘭キ
ーコンドル」【写真4】の登場が、
パチスロを新たな時代へと導くこ
とになる。

「克蘭キーコンドル」は、その
名前のとおり特徴的なキャラクタ
ーである「コンドル」をパネルや
絵柄に採用し、標準的なAタイプ
に加えて大量リーチ目マシンとし
て登場を果たした。登場当初は、「出
ない」「辛い」といった声ばかりが
聞こえ、必ずしも評判が良いとは
いえなかったが、登場から数か月
が経過して、その秘めていた能力
が明らかになると「克蘭キーコ
ンドル」を取り巻く環境は一変す
ることになる。

「克蘭キーコンドル」は、ビッ
グボーナス中のリプレイはずしと



【写真4】克蘭キーコンドル

通常時に一定の箇所を狙い続けて
小役の取りこぼしを防ぐ打ち方で、
フリー打ち（適当にリールを止めて
遊技をおこなう打ち方）とは比較
にならないほどの効果を発揮する。
特にビッグボーナス中のリプレイ
はずしは、実践すればフリー打ち
に比べ、平均プラス60枚もの効果
があり、目押しに自信がある若い
プレイヤーを中心に人気を博した。
「己の技術が獲得枚数に直結す
る」、このことが、若いプレイヤ
ーが興味を持つ大きな要因であっ
たといえよう。

シンプルで完全告知 愛された「ジャグラ」

『克蘭キーコンドル』以降も、
大量リーチ目や技術介入要素を前



【写真6】サンダーV



【写真5】ジャグラ

面に出した機種は次々と登場する。
その一方で、対極的ともいえるシ
ンプルなゲーム性とボーナスの完
全告知を前面に押し出し、初心者
や年配層を中心に人気を博す機種
も登場する。

1996（平成8）年12月に登
場した、株式会社北電子の『ジャ
グラ』【写真5】は、「GOGOラン
プ」が点灯すればボーナス確定と
いう、非常にシンプルな完全告知
の魅力を広く知らしめた。今日も
多くのファンに愛されているジャ
グラシリーズは、ここから始ま
っているのである。

また、1997（平成9）年12
月には、これからのパチスロの方
向性を決定づける機種が登場を果
たす。チャンス予告演出を前面に
押し出した株式会社メーシー販売
の『サンダーV』【写真6】である。
予告音やリールバックライトのフ
ラッシュなど、光と音を用いた演
出は、間違いなくパチスロの遊技
の幅を広げたといっても過言では
ないだろう。

目押し技術の重視が 新機能のCTへ発展

1998（平成10）年2月、千

葉県の幕張メッセで「パチンコ産業フェア98」【写真7】が開催される。パチスロも初のチャレンジタイム搭載機いわゆるCT機を展示して注目を浴びる。

CT（チャレンジタイム）機とはどんなものだったのか簡単に説明しよう。

基本、Bタイプのみ搭載可となっていたため、登場を果たしたCT機はBタイプもしくはシングルボーナスの集中も搭載しているBタイプとなっている。

CTの流れは、まずビッグボーナスの当選時におこなわれるCT抽選に当選するところから始まる。CTに当選すると規定ゲーム数（最大150ゲーム）または規定純増枚数（最大214枚）を超えるまで、リプレイ及びボーナス成立時以外はリールが無制御状態となり、目押しで小役を自由に揃えることが可能になる。実際には、CT中もボーナス当選の可能性がある為、とにかく小役を連続して揃えて規定純増枚数近くまで持っていく、



【写真7】パチンコ産業フェア98

あとは超えないように獲得の枚数調整をして、ボーナス当選を待つという打ち方が一番効率の良い打ち方として採られた。市場へは、サミー株式会社の『ウルトラマンクラブ3』【写真8】、株式会社ネット（現在のネット株式会社）の『クロスCT』【写真9】とCT機は次々登場を果たしていく。『克蘭キーコンドル』から始まっている目押し重視の技術介入要素は、CTという新機能へと発展を遂げ、パチスロの無限の可能性を感じさせるものであった。ちなみに5号機でもCTは存在するが、規定の変更により特定図柄を揃えることで発動するボーナス扱い的な要素が強くなっている。同じCTという言葉を使用しているが、全くの別物であるといえよう。

さて、この頃、それまで沖縄にしか設置されていなかった30の仕様のパチスロが本土上陸を果たす。株式会社ネット（現在のネット株式会社）の『ジュリアン30』、株式会社バイオニアの『シオサイ30』【写真10】などから本土上陸は始まっているが、鹿児島県をはじめ九州地方から次第に広がっていき、現在では、ほぼ全国で30の仕様の

【写真8】ウルトラマン倶楽部3



©円谷プロ
©BANPRESTO

【写真9】クロスCT



©from KENGO KAJI/art NORIYOSHI INOUE

【写真10】シオサイ30



パチスロを見ることが出来る。

マルチライン機と大量獲得機の登場

CT機の登場からまもなく規定の解釈の変更により、パチスロは更なる進化を遂げることになる。ここで登場を果たすのが、7ラインや8ラインといった有効ライン数を増やしたマルチライン機と、ビッグボーナス中に特定の箇所を目押しすることにより、従来より



【写真14】カゲツ



【写真13】ビーマックス



【写真12】マックスボンバー



【写真11】ドクターA7

も多くの獲得が可能となる大量獲得機である。

マルチライン機は、4号機の規定において、有効ライン数がビッグボーナス確率の上限値を決定する基準となっていたため、有効ラ

イン数を増やすことでビッグボーナス確率を引き上げられるというメリットがあった。市場へは、山佐株式会社の7ライン機「ドクターA7」【写真11】、サミー株式会社の8ライン機「マックスボンバー」【写真12】などが登場している。

大量獲得機は、それまでプログラム上の確率に基づいて期待値が算出されていたが、規定の解釈の変更により、フリー打ちした場合の期待値を基準に小役確率を設定できるようになったのである。市場へは、アルゼ株式会社（現在の株式会社ユニバーサルエンターテインメント）の「ビーマックス」【写真13】、山佐株式会社の「カゲツ」【写真14】などが登場している。



【写真15】シーマスターX

4本目のリールなどハードの進化も魅了

新しいゲーム性のパチスロは、登場する度にファンを驚かせ魅了したが、ハードの進化もまたインパクトは絶大で従来のパチスロファンを驚かせ魅了したのは勿論のこと、新たなファンを引き付けることにも成功している。1999（平成11）年7月に登場した山佐株式会社の「シーマスターX」【写真15】は、それまで「サンダーV」に代表される予告音やリールバックライトのフラッシュなどのチャンス予告から、テトラリールと呼ばれる4本目のリールを搭載することで、新たなチャンス予告を発生させる

方法をとった。リール以外でチャンス予告をおこなう発想は、この後、液晶搭載機の登場へと繋がっていく。

このようにパチスロは、4号機に入り、画期的なゲーム性が次々と考案され、市場での台数を着実に伸ばしていく【表1】。このことは、社会におけるパチスロの認知度向上に繋がっていくことを意味している。AT（アシストタイム）機・ストック機の登場と更なる進化を遂げる4号機後半については、次回紹介することにしよう。

【表1】パチスロ設置台数推移

